

令和4年度第1回富山市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和4年11月2日（水曜日）

午前 10時開会

午前 11時閉会

2 場 所 本庁8階大会議室

3 出席者 富山市長 藤井裕久

富山市教育委員会

教育長 宮口克志

委員 若林啓介

委員 藤井久丈

委員 尾畑納子

委員 高田健

事務局関係

教育委員会事務局

事務局長 砂田友和

事務局次長（総務・社会教育担当） 古西達也

事務局次長（学校教育担当） 竹脇孝志

教育総務課長 本郷由佳

学校再編推進課長 山口雅之

学校施設課長 高瀬雅基

学校教育課長 川端紀代美

学校保健課長 宮前仁

生涯学習課長	高橋 祐子
教育センター所長	河原 弘幸
教育総務課主幹	大島 聡
教育総務課長代理	余川 毅
教育総務課管理係長	河西 麻里子
企画管理部	
企画調整課長	高橋 洋

4 議題等

議題1 未来へつなぐ 富山市の教育 ～「教える」から「育てる」へ～

5 会議の要旨

○開会

○市長あいさつ

○議題1 未来へつなぐ 富山市の教育 ～「教える」から「育てる」へ～

学校教育課長から、以下の点について説明を行った。

- ・学校再編は、単なる人数合わせのように捉えられることが多いが、一定規模へ再編することで、より一層充実した教育を行うことが可能となる。予測不可能な未来を生きていく子どもたちに、どのような教育を今から行うべきか、今後進むべき方向性を明らかにするため、学校教育の視点を中心に学校再編のあり方を考えた。
- ・「未来へつなぐ 富山市の教育」全体像について（資料2枚目）
- ・「未来へつなぐ富山市の教育」の実践に向けて取り組むべき主な課題について（資料3枚目）

○意見交換

【藤井市長】

今、事務局から説明があったことについて、教育長の思いがあればお聞かせいただきたい。

【宮口教育長】

まず、今回の総合教育会議の場において、市長、教育委員の皆様方と、これからの富山市の教育、未来へつなぐ富山市の教育について意見交換する場を設けていただいたことを大変ありがたく思っている。

今ほどの学校教育課長の説明にもあったとおり、これからの変化の激しい時代、私たちがこれまで経験したこともない予測不可能な様々な出来事が起こってくる時代を力強く生き抜く子どもたちにどんな力が必要なのかということがまず重要だと思っている。

昨年度から市内全域で進めている学校再編は、学校教育課長の説明にもあったとおり、単なる人数合わせをするということではない。小・中学校の新学習指導要領が完全実施になった時期とも重なっており、教育の質の向上に向けた教育のパラダイム転換の絶好の機会と捉えていきたいと思っている。

そこで、まず何といても、子どもたちの確かな学力の育成は急務、必要不可欠だと思っている。小・中学校時代にどんな力を付けておく必要があるのか、これまでのテストによる点数、これもしっかりと取れるような子どもたちであるとともに、いわゆる点数では表せない非認知能力というものをしっかりと育てていく必要がある。これらの両方をしっかりと育てる教育を実践することが重要だと思っている。

「主体性のある子どもの育成」が代表的なものとして挙げられているが、最後まで諦めずに粘り強く頑張ること、失敗したことを生かして成功するまで粘り強く頑張ること、あるいは困っている友達や仲間の手を差し伸べること、コミュニケーション能力など非認知能力と言われるものが様々あると思うが、そういった活動は学校における一定規模の集団活動の中で培われる機会が多くあると思う。子どもたちにそういう力を付けるということを教員がしっかりと認識

して、日々の教育活動に当たっていくようにと常々申しているところである。

そのための取組としては、資料に教員の意識改革とあるが、PBL（問題解決的な学習）を大事にしていくということ。あるいは子どもたちの育ちというのは、同じ年齢であればみんな同じように育っていくというものではなくて、個々に得意不得意があるし、すぐできる子どもも習得するのに時間がかかる子どももいるわけで、そういった一人一人の実態に応じて、イエナプラン的な考え方を取り入れて教育を推進していくということ。また、ICTを有効に活用して子どもたちの学びを確かなものにしていくということ。また、今、山室小学校が中心になって取り組んでいるが、子どもたちのプレゼンテーション能力をしっかりと身につけること。そういった力もこれからの社会でグローバルに活躍する子どもたちにとっては必要不可欠であると思っているので、それぞれの学校で取り組んでいる教育の効果を市内の学校に共有して質の向上を図っていきたいと考えている。

一方で、一定規模の学校にするという取り組みは、5年、10年、15年という一定の期間を要すると思うので、当面は小規模に属する学校も出てくる。そういった学校においても、子どもたちに必要な力をつけていく上で必要な方策を講じていく必要があり、今話したようなイエナプラン的な考え方に基づく教育やICTの有効活用をしっかりと行っていきたいと考えている。

また、コロナ禍の影響もあると思うが、不登校やいじめの増加など、子どもたちに様々な症状が見られるということがあり、大きな規模の学校には行きづらいという子どもたちもいるのが現状としてあるので、MAP（適応指導教室）や各学校の相談室の環境整備、教員の関わり方、保護者を対象とした相談会の充実ということも近年力を入れて取り組んできているところである。

また、現在、小見小学校、朝日小学校の2校が小規模特認校となっているが、市域全体を見渡したときに、そういった小規模校だったら学べるのではないかという子どもたちの環境として、今ある大山と婦中地域以外にも、例えば富山地域の北部の海沿いの地域にもそういった学校があったらどうかなど、様々な視点から市全体を俯瞰して、子どもたち一人一人の教育ニーズに応じていく環境づくりを進める必要があると思っている。

そういったことを進めていく上で、この2番にある多様な学びの場をどう検

討するか。学校だけではなかなか解決できない問題もあるので、コミュニティ・スクールの導入ということもあるが、保護者や地域との協働が欠かすことのできない大切な要素になってくると思う。そういったお力添えをいただきながら、教育委員会、保護者、地域、学校が一体となって、この「未来へつなぐ 富山市の教育」を推進していけたらと強く思っているところである。

これまで富山市が進めてきた教育の一層の充実、深化・発展をしっかりと目指して取り組んでいきたいと思っている。まだまだ言いたいことはたくさんあるが、後ほどの意見交換の場でということで、私からのお話は以上とさせていただきます。

【藤井市長】

今ほど教育長から熱い思いをいただいたところであるが、委員の皆さんから、何かご意見があればお聞かせいただきたい。

【若林委員】

今ほど説明があったことについては、まさにこのとおりだと思う。ただ、問題が非常に多岐にわたっており、複雑な部分もあるため、どの辺に力点を置いてやっていくかということも考えなければいけない。

やはり、何とんでも、学校再編の推進が非常に重要だと思う。しっかりとした教育環境を担保する、保障するというのと併せて、やはり効率化ということも必要で、まさしく教育というのは未来に対する投資活動だと考えると、いかに限られた財政の中でしっかりと効率を高めていくということが必要であり、当然、避けては通れないところだと思う。

学校再編は時間がかかる問題であるが、できるところからどんどんやっていくことが必要だと思うし、小規模校の位置付けについても、必ずしも独立した学校として考えなくてもいいと思う。例えば、分校やサテライトであるとか、特に今、一人1台端末が実現しているわけで、そういった中でしっかりとした教育環境を担保していくことが必要だと思う。

残念ながら、OECD38か国の中で、日本の教育に対する公的支援、GDP比率が非常に低い。限られた財政の中でいかにうまくやっていくか。今まで

の日本型の学校教育、確かに限られた財政の中で誇れる成果を上げてきていると思うが、今後の時代の変化に対応していくためには、従来のやり方、場合によっては法律や規制にとらわれないやり方も含めて考えていく必要があるのではないかと思う。

もう一つ非常に懸念しているのは、今、教員に要求されている要素は非常に多く、しっかりとした教育を行うために、教員の質の向上というか、しっかりとした教員の育成が必要になってくる訳だが、昨今話題にもなっていたが、例えば小学校教員の採用試験の競争倍率が富山県1.6倍、全体でも2.2倍である。様々な要因があり、一概に倍率が低くなっていることが資質と関連あるとは言えないと思うが、大学の人間発達科学部や教員養成課程にいる人が、教員にならずに一般企業に就職していくという状況、やはり教員という仕事、職業の魅力が総体的に低下してきているというのは非常に大きな問題だろうと思う。

そういう意味においても、やはり教員の働き方改革、そのためにも学校再編は非常に重要なポイントではないかと思う。

この内容について、特にここがおかしいと申し上げるつもりはないが、あえて1つ、中教審の答申と比べて抜けているとすると、例えば、夜間中学をどうするかという問題があると思う。過去において学ぶ機会を十分に得られなかった人たちの、いわゆる再教育の機会としての夜間中学の設置はどこかで考えなければいけないと思う。不登校の児童生徒の受入れと併せて、考えていく必要がある課題だと思う。

【藤井委員】

「未来へつなぐ 富山市の教育」について、3つの矢ということで、非常によくまとめられて分かりやすいと思う。

どうしても学校再編そのもののやり方や、今後どうなっていくのかということに目が向いてしまいがちになるが、そもそも教育の在り方を時代とともにどう考えていくかということを中心に考えながら、これからの少子高齢化、富山市の中でどんな風に地域が変わっていくか、今の子どもたちがどう育っていくか、やはりその時代によって科学的・技術的なことや経済的なことによって大きく変わるので、このようにまとめられて、2022年から2024年とい

う中で大きな目標を掲げられているのは非常に分かりやすいと思う。

昔は学力というとテストの点数のようなものであったが、改めて確かな学力とは何かと考えると、教育長も言われたように、非認知能力がとても大切になってくるし、そうであれば、インターネットで検索すれば何でも分かる時代に何をもって学力とするのかということも考えながら、やはり主体性がある子どもたちを推進していくという中で、一人一人に対してどうしていくかが大切になると思う。イエナプラン教育や適応指導教室、学校の少人数教育についても触れられているのは非常にいいことだと思う。

以前は、一律な形の中での学力向上というイメージだったが、今は多様性の時代であり、多様な学びということでICTやGIGAスクール構想もあり、これからのあり方としてはよいと思っている。

ただ、少し気になるのは、この多様な学びの場の提供について、「教える」から「育てる」へと子ども主体に変えていこうとする中で、子ども主体だからどんどん新しいものを取り入れていこうとすることはよいが、それに見合った教員の配置など様々なことを考えていかないと、結局のところは好きなようにさせているのではという形になり、本当の意味での確かな学力やたくましさは育たないのではないかと思う。この多様な学びの場の提供に関しては、しっかりとした体制やそれなりの予算や人が必要ではないかと思う。

職業柄、少し気になっているのが、医療的ケア児の問題である。今、インクルーシブ教育という中で、例えば、鼻からチューブを入れている子どもや補助具を着けている子どもなど、様々な子どもたちのことを考えると、家庭と病院の行き来だけで母親と一緒にいるだけではなく、学校へ行っている子どもたちと一緒に体育などを行うということも必要で、それにはやはり、その家庭を支援する取組みや細かな支援が必要ではないかと思う。

特に、学校の送り迎えを何とかしていくとか、ほかの子どもたちと一緒に活動しようという中で、安全性となると、単に看護師さんが配置されているだけでいいのかどうか。急に何かあったとき、バックアップの体制はどうか、近くにある病院はどうか。医療的ケア児以外でも、多様性を増やすということは、これまで以上に細かいことまで計画をしてやっていくことであり、多様な学びの場の提供こそ、色々なことを考えて、人、物が必要ではないかと思

う。

それから、3つ目であるが、保護者と地域との協働とまとめてある。地域と共にあるということは、ますます少子高齢化になってくる中で、この地域はどうなる、この地域はこうなるということも併せて、そして、その地域を統合するというのを考えるとなると、今も色々やっているが、ますます地域との話し合い、そして地域がどうなるかということを実験しながら行う必要があると思う。

いずれにしても、未来へつなぐということの中で、この3つの矢がしっかり考えられてまとめられているのは、非常に現実的でもあり、将来の計画も大変よくまとまって非常にいい提案だと思う。

【尾畑委員】

皆さん言われてしまわれているので、なかなか別のことを申し上げるのは厳しく、言い方が変わっていても同じことになるかもしれない。中教審でも取り上げられている日本型の知・徳・体については、確かに私の大学にも、こういう方針で育てられた子が大学に入ってきており、20年ぐらい前に入ってきた学生と比べ、最近は割と画一的でおとなしくなっていると感じる。先生は大変やりやすくなっているが、一方で、これからの社会で様々な課題に対応してうまく生きていけるのか、生き抜けるのかという心配を若干持っている。

そういう意味で、今回の3本の方針というのは非常によく考えておられると思う。

とにかく社会環境が大きく変わっていく中で、「主体性のある子ども」について、相手のことも理解しつつ自らをどう考えて行動するか、そういう相手との関係性のようなものも理解できる力を持つことが大事だと思っており、この点も含めて「主体性のある」と私は理解している。

例えばPBLやインクルーシブ教育も、その関係者だけではなく、みんなで社会をつくっていきましょうという、SDGsの目標に共通するようなことを含めて主体的な行動ができるようになっていけたらいいなと思う。

ただ、教員自身が多様な体験していないと、なかなか難しいとも思う。そういう意味では、この3つ目の保護者や地域との協働により、少し力をいただく

ことが大事ではないかと思う。

2番目の矢は教育の専門家でもできるが、3番目の矢の保護者や地域との協働というところをもう少し強化していかないといけないと思う。

次に、教育委員として少人数の学校も行かせていただいたが、前回の総合教育会議の時に、あまり乱暴な再編はよろしくないというか、少し時間をかけてというようなことを申し上げたかと思うが、実際に現場に行ってみると、少人数のよさもあるが、一方で、将来の子どもたちを育てるにはもう少し改善しないといけないということも分かった。一人一人が将来しっかりと育っていくためには、一定の人数、男女比もあまり偏らないような教育環境が義務教育として必要だと実感し、これまでと考え方が少し変わった。

あともう一点、これまでの方針については、文科省もいっているので、これはこれでよいと思うが、富山市の教育としての独自性があればさらによいと思う。スポーツ面ではいろんな選手が育ってきていて、よくなってきている。一方で、例えばICTを活用しながら、情報技術や国際性など具体的にどのようなスキルを磨き、どのような人材を育てていくのかという点である。先ほど夜間中学の話も出たが、ICTも、かつては先端的に力を注いだ時代もあったので、富山市はこれが凄いいいものができるらいいと思う。

そのためには、先生方の学びが大事なので、先生方の学びを高める仕組みづくりも今後考えていく必要があるのではないかと考えている。ただ勉強しろとか、こんないろんなことをやれというだけではなく、まずは先生方を育てるための仕組みをつくっていくことも大切だと思っている。

【高田委員】

皆さんおっしゃられたことと重複すると思うが、改めてこの資料を見させていただいて、解決しなければいけない問題がたくさんあるということを実感している。

学校再編の話があったが、私はやっぱり小規模校は小規模校のよさがあると思う。例えば、上の学年の子が下の学年の子をお世話するとか、そういったこともある。ただ、やはり学校というのは、ある程度の数の児童生徒の中で集団活動することで、色々な人の意見を聞いたり、その中で自分の意見を言ったり、

人との付き合いなども勉強することは非常に大切だと思っている。再編の対象校の地域の方々は、様々な意見があると思うが、そういった方々の意見を聞きながら、ある程度納得してもらいながら、学校再編は進めなければいけないと思っている。

この中にもあるが、最近、私たちが小さいときより、何らかの理由で学校に行けない子が多くなっている。ただ、本当は学校に行きたくて勉強もしたいが行けないという子もいるので、そういった子たちのケアというか、いかに様々な手段を使って勉強してもらう場を提供するかというのが大切だと思っているので、そういった子を対象とした新しい学校やシステムをまた考えなければいけないかなと思う。

先ほど若林委員からも、先生になりたい人が減っているという話があったが、これも倍率が下がっているからという一面では言えないと思う。やはりある程度先生になりたいという人が増えないと、教育の質は上がっていかないと思うので、学生が先生になりたいという環境、先生方の働き方改革というのは必要であり、こういったことも進めていかなければいけないと思う。

全ては子どもたちに質の高い教育の場を提供することにつながると思う。もちろん、ここに書かれていることはすぐに解決できないから書かれているのであり、なかなか一朝一夕には解決できないと思うが、少しでも子どもたちのためにこれらの問題を解決していかなければいけないと思っているので、教育委員会の皆様には、これまで同様のお力添えをお願いしたい。

【藤井市長】

委員の皆様には大変貴重なご意見をいただいた。毎回会議を開くごとに、学校再編を進める意味について、多少の考え方の変化も含めながら深まってきているのではないかと感じている。

若林委員からは、限られた財源や時間の中で、時代の変化に応じた教育を実践していくには、やはり学校再編は機を見てしっかりと対応していく必要があるのではないかと、その中で、富山市の目指す教育を実現していくべきではないかとのことであった。藤井委員からも、そもそも教育そのものの在り方をどうするのか、また他の委員からも意見をいただいたが、富山市の教育の特色をど

のように出していくのかということも非常に必要だと思った。

多様性を認めるインクルーシブ教育もどんどん進めていく必要がある。その際には、専門性の高い人材や一人一人に向き合うスタッフ、そのスタッフのスキルなども含めて、様々な新しい取組が必要だということを改めて考えている。多様性をしっかり認めて、そのような様々な子どもたちにしっかり向き合い、細かいケアをしながら富山市の教育を届けていくためには、こういうこともクリアしていかなければならないと改めて感じた。

また、この3本の矢を見ていて、SDGsの観点、富山市の教育の特色として誰一人取り残さないという方向性が大きく出ていると思う。本日の議題にも「教える」から「育てる」へ」とあるが、誰一人取り残さない、学び直しもできるというところまで全て含んだ懐の深さというものも必要ではないかと思う。そういう方向が見えれば、理解も進むのではないかと思った。

高田委員からは、学校再編の必要性と小規模校のよさについて話があった。これは教育長からもあったし、事務局の説明にもあったが、小規模校のよさは私も十分に感じている。と同時に、適正規模でないと学べないこともあることも十分感じているので、誰一人取り残さないということ、多様性、多様なニーズに答えていくこと、地域性を生かして子どもを育てていくこと、そういう観点の中から、小規模校の良さも見つめ直してみたいと感じた。

また、不登校児童生徒に対する取組みや不登校特認校の話もあったが、そういう可能性についても必要なことではないかなと感じた。

せっかくの機会なので、どなたからでも、まだ言い足りないところがあればご意見を伺いたい。

それでは、教育長、先ほど何か心残りのような発言だったので、皆さんのご意見を聞かれて改めてご意見を伺いたい。

【宮口教育長】

分校やサテライトという発想も今後必要になってくると思う。また、夜間中学については、県とも協議を行う必要がある。富山市だけの問題ではないと思うので、少なからずそういったニーズもあるということであれば、どこにどういう形で設置するのか、調査していく必要があると思っている。

藤井委員の発言にもあったが、今、子どもの主体性を前面に出して様々な取り組みを行っているが、校長会や学校訪問の場でいつも話しているのは、教えるべきことはしっかりと教えなければならない、何でも子どもの好き放題にするということではないということ。例えば数学の定義を子どもに考えさせるということはあるていどではないことであり、基本はしっかりと教えた上で、それを子どもたちがどう使っていくかということが大切である。

また、子どもたちが自由に考えるようになっていくと、自由な発想を子どもたちがするので、教員がそれをしっかりと理解できるかどうか大きな課題になっていくと思う。これまで以上に柔軟な発想や教材に対する深く広い知識が教員に求められることになる。主体的な学び研修会を3年前から開始しているが、その中でも教員にそのようなことを伝えている。教員が思ってもいないことを子どもが言ったときに、先生がそれをどう可能性として感じ取り、位置づけていくかということが非常に重要になってくると思うので、そのような研修をより一層充実させていく必要があると思う。私の拙い実践なども取り入れながら、説明をしたり話をしたりしているところである。

尾畑委員の発言にあった相手のことを考えて行動するというのも、非常に重要なことだと思っている。「自由の相互承認」ということを常々言っている。自分がやりたいことと相手のやりたいことが重なる場合がある。そういうときに、自分がやりたいと思っていることと同じように相手も思っている、ということを感じ取ることができる力を子どもたちが育むことが非常に重要であると思う。

これが富山市の教育というものがあればという発言もあったが、花火を打ち上げるのではなく、きちんと原点に立ち返った教育を富山市はやってきたと思う。一方で、今気になっているのが、子どもたちもとても真面目なので、先生が黒板に書いた文字をノートに一生懸命書き写している。果たしてそれを子どもたちが理解しているのかということが気になっている。

逆に、子どもたちが教科書や資料集を基に、ICTなどを活用しながら、自分で自分なりの板書を作成し、構造的な理解をするという、そういう主体性を身に付けていきたい、そんな教育を推進していきたいと思う。いつもそのようなことをやるという訳ではないが、そうすれば、土日や長期休業期間中であつ

でも、子どもが自分でやりたいときにやりたい学びを推進することができる。そういった教育を推進できないかということで、来年度以降、いくつかの学校の授業公開を実施しながら、そういった教育の方向性をしっかりと模索していきたいと思っている。もう既に取り組んでいる学校も出てきている。

最後に、不登校児童生徒について。教育委員とも昨年、岐阜の不登校特例校である草潤中学校に視察に行ってきたし、福山のイエナプラン校にも行ってきた。また、様々な規模の義務教育学校の視察等も実施してきているところである。今現在、山田で不登校の子どもたちが自然体験をして、サツマイモを育てて収穫する喜びを感じたり、好きな遊びをしたりすることで、学校に行きづらいついて感じている子どもたちをどうサポートすればいいかということについても取り組んできているところである。最近ボッチャなど、障害を持った方がやっておられる軽スポーツを体育協会で推奨している事業があり、パンフレットを見たが、ぜひこういう特別支援が必要な子どもや、不登校でなかなか学校に行けない子どもたちを対象に、親子や子どもたち同士でそういったスポーツをしながらコミュニケーションを取れるような取組みができないかということをお願いしたところ、やりましょうと快くお返事をいただいたところである。

ただ、根本的な解決策になるかどうか分からないところがあるため、これからも折に触れて必要な対策を、個人を見ながら一人一人の教育ニーズに対応していけるような教育制度や対策を検討していきたいと思っている。

【藤井市長】

様々な形態に対応していくということ、またそのために技術的な面や教員のスキルアップが必要ということも非常によく分かった。

学校再編の議論が本格的に始まった中で、今回この会議でいただいた意見は貴重だと感じている。

また、教育委員会からお示しいただいた「未来へつなぐ富山市の教育」の全体像についても、しっかりと認識させていただいたし、皆様のご意見を伺えたということで、その中身に対する認知度や熟度も本当に深まったと思う。

いずれにしても、学校は地域の中心的なものであり、学校再編は地域の声を大切にして進めるものなので、今教育委員会が中心となって進めているが、必

要があれば市長部局も入っていく。例えば防災がどうなるのか、地域のコミュニティ活動はどうなるのか、あるいは地域の方々の体育や健康増進に学校も使われているのでどうなるのかなど、様々なご意見をいただくので、地域の声をしっかりと聞きながら、教育委員会と一緒に、市長部局として対応できることにはしっかりと取り組んでいきたいと意を新たにしているところである。

今回いただいた意見を大切にしていきたいと思っているが、教育委員の皆さんには、こういう会議の場に限らず、随時、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

それでは、事務局に進行をお返ししたいと思う。

【砂田事務局長】

今日このような貴重なご意見を伺わせていただく場に出席できたことは、今後、仕事をしていく上で大変貴重な時間をいただいたという気持ちでいっぱいである。今ほどのご発言をしっかりと理解、認識して、これからの仕事に十分反映していきたいと思う。

○閉 会